

2004年度

# モンゴルスタディツアー参加者報告



スタディツアー参加者 ©諸遊正彦 (スタディツアー参加者)

日本ユニセフ協会はモンゴルとカンボジアで事業を指定した募金を行い、支援をしています。毎年、子どもたちの状況や事業の取り組みを先生たちに実際に視察していただき、それを学校や地域で学習や広報活動に役立てていただいています。2004年度のモンゴルスタディツアーに参加された小学校、中学校、高校の先生の感想や意欲的な取り組みをご紹介します。

日程	2004年7月24日(土)～31日(土)
視察概要	①首都ウランバートルできびしい状況に置かれている子どもへの支援活動(指定募金事業の「身元確認センター」含む) ②辺境の地域できびしい状況に置かれている子どもや家族を地域で支える支援活動 ③地方から都会に出てきた人びとが住む地域での生活改善の支援活動
ユニセフの活動	80年近く続いた社会主義から、1990年に市場経済に移行したモンゴル。急激な市場経済への変革は人びとの生活に非常に大きな影響を及ぼし、きびしい状況に置かれる子どもたちが増え続けている。ユニセフは政府、NGOなどと協力し、子どもの保護に取り組んでいる。



①身元確認センター ©諸遊正彦  
②幼稚園 ©日本ユニセフ協会  
③バヤンゴル地区の衛生的なトイレ ©日本ユニセフ協会

## 小学校の取り組み

神奈川県海老名市立大谷小学校 朝井 美智 先生

### 応募の動機

5年生の総合的な学習「食を考える」で『水』を追究してきた子どもたちが行きついたのがユニセフの活動でした。そこで私は日本ユニセフ協会の学習会に参加し、モンゴルスタディツアーの募集を知り、応募しました。6年1組の子どもたちが作ってくれた現地へのおみやげをトランクにつめこみ「ストリートチルドレンを守ろう、減らそう」と心に刻みながら「スーホの白い馬」の大草原へのあこがれも抱いて出発しました。

### 視察の感想

青少年開発センター・コミュニティーセンター・少年院・身元確認センターなどの見学で、遊牧では生計を維持できず首都ウランバートルにやってくる家族の様々な問題を目のあたりにしました。エルデン・スーム(地方)では、幼稚園・病院・学校・保健所・ゲル(組立式住居)などを訪問し、ユニセフが地域で大きな支援を行っていることを知りました。

### 学校での取り組み

2学期、私の報告をしっかりと受け止めた6年1組の子どもたちは、ストリートチルドレンについて調べ、救う活動として修学旅行の小遣いを募金しようというところから始まりました。その後、ストリートチルドレンについて多くの人に伝えることの重要性に気づき、6年生全員で伝える活動に取り組み、日本ユニセフ協会学校事業部の方にお話ししていただき、水運び体験もしました。

市のふれあい教育の公開授業の日を伝える活動の日と決めました。「世界と手をつなごう」をテーマとして、「ストリートチルドレン」「5歳の誕生日を迎えられない子どもたち」「戦争や災害で被害を受ける子どもたち」「教育を受けられない子どもたち」の4グループに分かれ、各自調べたことを教えあい、伝える方法として、劇・紙しばい・ニュースショー・パソコンを使ったポスターセッション・体験ツアーなど様々な方法で取り組みました。ユニセフライブラリーから借りたビデオやパネルを使って実に多様な生き生きとした活動が行われました。伝える対象は先生や保護者、他学年の児童へと広がっていきました。6年生は自分たちの活動に満足し、自信を持ちました。「6年生になったらああいう活動がしたい」と期待させる学習として大谷小学校に定着させていきたいと思います。



ニュースショーで伝える子どもたち ©朝井美智



劇で伝える子どもたち ©朝井美智

**応募の動機**

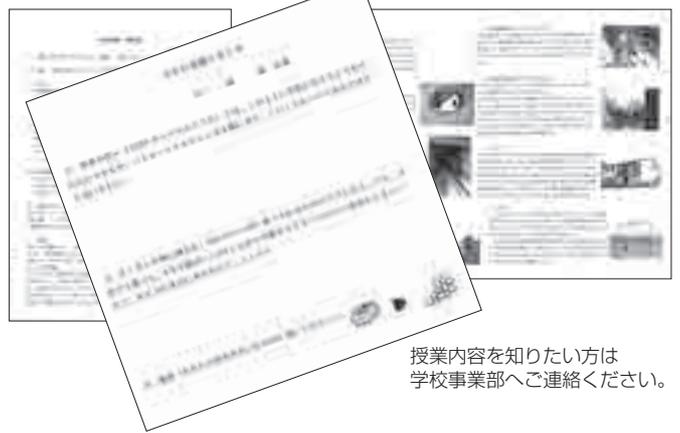
5年ほど前から、人権教育推進主任として、人権教育にかかわり、大きな柱として、特に「平和・国際理解」に重点を置いてきました。ユニセフ教材を道徳、総合の授業で活用させていただき、生徒会の取り組みとしてユニセフ募金も定着しています。「世界のあらゆる国、特に子どもたちの現状に目を向けよう」と話してきましたが、私自身が実際に、特にアジアの国を訪れたことがなく、機会があればぜひ行ってみたいと切に願い、自分の目で見て、子どもたちに伝えていけたらと思っていました。

**視察の感想**

きびしい状況にある子どもたちについて視察をしていく中で、市場経済に変わったことでモンゴル国内に起こった変化が子どもたちに大きな影響を及ぼし続けていることがわかりました。モンゴルの人々は想像を絶する冬の寒さの中で、家族が力を合わせ助け合って生活し、一日一日を大切に自然に感謝して生きてきた人々だと思いました。

**学校での取り組み**

「ユニセフ募金から世界の子どものことを知ろう！」をテーマに生徒会と連携し、10月の芸術祭でユニセフ広場を開催。全校生徒が書いた平和メッセージやユニセフパネル、モンゴルのレポート・写真を展示したり、パソコンで日本ユニセフ協会のホームページを閲覧しました。道徳ではユニセフ教材等を活用し、児童労働や遊牧民の子どもたちの生活等、モンゴルの子どもたちのきびしい状況を学びました。



授業内容を知りたい方は学校事業部へご連絡ください。

高校の取り組み

**応募の動機**

21世紀の国際社会に生きていく高校生たちが開発途上国を正しく理解し、地球に生きる仲間としてどのように協力・連携してゆくことが望ましいか考える機会と、行動する場を学校の中に持っていることは重要だと考えています。しかし、私自身に開発途上国の実情に関する知識が少なく、出かける機会も少ないため、モンゴルを視察し、開発途上国への理解と、支援のできる教育をしていきたいと思い、応募しました。

**視察の感想**

国家体制が1990年に社会主義から市場経済に急激に転換されたことで、モンゴル国民は多大な混乱と苦難を強いられ、訪問中通訳してくれたアディアさんは町の中から物がなくなった子ども時代を振り返り、深刻な当時の生活の様子を何度も話してくれました。地方では換金率の高いヤギの過放牧が行われたり、雪害によって財産を失った遊牧民が首都ウランバートルに流入して、治安の悪化・孤児の増加・基礎的社会サービスの未整備など深刻な状況が続いていることを改めて理解しました。

現地では、ウランバートル(都会)、エルデン・スーム(地方)における子ども・母子・家族への支援に効果的な事業を幾つも視察しました。埃で汚れた顔の子どもたちも私たちを笑顔一杯で迎えてくれ、逞しく生きる姿に胸が熱くなることが何度かありました。

**学校での取り組み**

豊科高校は長野県の安曇野の中心に位置し、生徒会では10年前からタイ国農村部の学校へ通えない子どもたちへの奨学金制度の支援を開始し、JRCクラブではアフリカに学用品・スポーツ用品を送る活動を積極的に継続しており、日常生活の中に国際理解・人権意識の素地のある学校です。

帰国後、モンゴルを写した写真パネルの展示や国の様子、支援の実際について生徒に紹介し、支援の成果が大勢の子どもや母親の命を助けていることを学習しました。特に生徒の関心を集めたのが、現地で大いに活用されている母子教育用の紙パネルです。生徒たちは「識字率の低い中でも、保健・衛生・栄養などの知識を日常のものとするために利用しているパネルにモンゴル人の熱意を感じる。ユニセフスタッフや現地の指導者たちが国の未来のために懸命に活動をしていて感激した」という意見を発表してくれました。

私たち参加者は、隣人への理解と協力こそが大切であることを改めて学ぶ夏となりました。そして学ぶことにより、考え・行動する日本の若者が多く現れるよう学習を展開していきたいと感じています。



パネルを使いながら、ボランティア育成の学習会 ©諸遊正彦



遊牧民の家族 ©日本ユニセフ協会